

ブラジル「リオ五輪後」の阿鼻叫喚

東京が学ぶべき「反面教師」

昨年の夏季オリンピック開催から一年を経たりオデジャネイロで、五輪期間中だけ抑え込んでいたギャング団抗争が完全復活している。七月中旬には、リオの国際空港と市内を結ぶ高速道路上で、犯罪組織と武装警察の激しい銃撃戦が起こった。市民を恐怖のどん底に突き落とすような事件が相次ぎ、観光客は激減している。

「流れ弾の犠牲者は一日三人」。地元紙が報じる「非常事態」は、わずか一年前にここでスポーツの祭典が開かれたことが幻だったかのような凄惨さで進行している。背景にあるのは、サンパウロ拠点の「首都第一コマンドー(PC C)」とリオ拠点の「赤いコマンドー(CV)」という、ブラジルの二大犯罪組織のギャング団抗争だ。これを鎮圧しようとする武装警察との間で三つ巴の、重武装の戦闘が日常的風景になってしまった。警察官の犠牲者は今年だけで九十

人を超えて、「ベトナム戦争時の米兵より死亡率が高い」(リオ地元紙)と評される。「警射殺事件」が頻繁に報じられる米国でさえ、今年の死者は二十人超だから、リオのギャング団抗争の無軌道さが分かるだろう。

巨額贈収賄事件がぞろぞろ

昨年の五輪開催時には、政府は国の威信をかけて、八万人以上の兵隊と警察官を主要五輪施設周辺や景勝地コパカバーナ海岸に配備した。

五輪を取材した日本の大手紙の元リオ特派員は、「主要なギャング団に『停戦合意』をさせて、とにかく無事に五輪を終わらせようと必死だった」と言う。

三十以上ある貧困地区「ファベラ」は、ふだんは犯罪多発の「ノ・ゴ・エリア」だが、昨年は比較的治安が良い場所を選んで、海外からの観光客向けに「ファベ

ラ・ツァー」まで組織された。ところが、祭典後に厳戒態勢が解除されると、ギャング団抗争とファベラでの犯罪も、たちどころに戻ってきた。五輪閉幕の翌九月、PCCはCVとの間の停戦破棄を宣言して、抗争が再燃した。

今年一月には、ブラジル国内の複数の刑務所で、ギャング団構成員の収監者同士の衝突事件が相次いで発生し、死者は百人を超えた。死体はナタなどで腕や足、首などをバラバラにされたものばかりで、大半は生存中に切り刻まれていた。日本の暴力団の「仁義なき戦い」どころではない、凶暴さと残虐さが際立つ、私刑の応酬だ。暴力激化と並行して、ブラジルの政治家たちがいかに「五輪」という蜜に群がったかも、続々と明らかになった。

ブラジルの政治家腐敗はすでに伝説的だ。

五輪前には、国営石油会社「ペ

リアナ夫人にも逮捕状が出された。ダブル不倫、双方離婚の末に、「州のファースト・レディ」となった同夫人の銀行口座には、複数の業者から三千六百万レアル(約十二億六千万円)の振り込みがあったことが分かっている。

トップ自らの巨額収賄は、高かった。マラカナン改修工事は当初見積もりの七億二千万レアルが十二億レアルに膨れ上がった。リオ五輪全体では、控え目な推計で約百二十億ドルかかった。

競技関連だけに限っても四十六億ドルまでふくらみ、英オックスフォード大の試算では五〇%以上の予算超過だった。契約業者は政治家への賄賂を請求額に上乘せした。これがコスト膨張の大きな要因だった。

同時期にリオ市長を務めたエドゥアルド・パエス氏には今春、円換算で五億円の賄賂が渡っていたとの疑惑が発覚した。五輪閉幕の際、リオを訪れた小池百合子・東京都知事とがっちり握手をした人物である。

「語り口はソフトだが、面と向かって平気でウソをつく。『将来の



五輪バブルがはじけ、平和も発展も露と消えた(スラムを巡回する兵士・左、荒れ果てた五輪水泳競技会場)

目の任期を全うできずに辞職した。州政府はサッカーファンの聖地マラカナン・スタジアム改修など、全体の四分の一を受け持っていた。

検察は、改修工事を受注したオデブレヒト社幹部の供述ビデオを公開した。その証言は生々しい。

「知事は一契約につき五%に固執しましたが、『私は払いませぬよ。五%というなら、別の会社にしてください。これまでだってずいぶん、お助けしてきたじゃないですか』と言いました」。この幹部は同社の「お助け」金額を、捜査当局に正確に明かした。

今年六月の判決文によると、前

知事が各社からかき集めた賄賂は、二億二千四百万レアル。直近の為替レートでは七十八億円。一三年には一レアル五十五円超だったこともあり、「オリンピック級」の巨額汚職だったことがわかる。受け取り先を隠蔽するための資金洗浄操作は六百件以上にのぼった。

前知事の事件では、同時にアド

トロブラス」がらみの汚職疑惑で、ジルマ・ルセフ大統領が弾劾を受けた(昨年八月末に罷免)。前任のルイス・イナシオ・ルラ・ダ・シルバ氏も今年七月、汚職と資金洗浄の罪で裁判所から禁固九年半の実刑判決を言い渡された(控訴中)。ミシェル・テメル現大統領は、食肉加工会社からの収賄容疑で、今年六月に起訴された。三代の国家元首全員に汚職疑惑があるのだ。

そんな国柄で、五輪予算を一手に握る自治体首長は何をしたのだろうか。

リオを州都とするリオデジャネイロ州のセルヒオ・カブラル前知事は、円換算で約八十億円の巨額横領で実刑判決を受けた。開催時のリオデジャネイロ市長にも五億円規模の収賄疑惑が持ち上がっている。

二人ともハンサムで弁舌にだけ、一時は「将来は大統領職も」と目されていた。

前州知事が逮捕されたのは、昨年十一月のこと。すでに在職時から、「五輪利権」の疑惑を持たれ、二〇一三年から一四年にかけて、市民の抗議運動の標的となり、二期

大統領」の可能性は完全に消えた。少なくともそう願いたい」とは、在リオの英国人記者の話である。

債務膨張で公共サービスが崩壊

五輪開催の昨年こそ、海外からのブラジルへの観光客は年間六百六十万人で史上最高を記録した。前年比で四・八%の増加だった。ところが今年は一、四月の四カ月で、リオデジャネイロ州の観光業は、前年同期比で三億二千万レアルもの減収を記録した。オリンピック開催前から同州およびリオデジャネイロ市の財政は破綻状態だったが、同州の債務だけで今や円換算で七千億円という途方もない金額に達している。

リオ市民の間では、何よりも税金が五輪バブル関係者を潤しただけで終わり、公共サービスが崩壊したことがうらめしい。SNSには、「我が国は医療、学校、治安のどれをとっても貧乏なのに、カネはどこに消えたのか」「エベレスト山登頂のはずが、氷河にどっぶり埋まった気分だ」との恨み節があふれる。「東京は違う」と、いったい誰が保証できるのだろうか。